

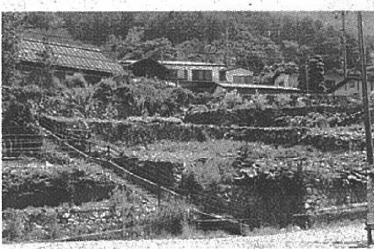
するための工夫が行われた。首の周りに垂れをおろした兜

甲府盆地と富士山の間に横たわる御坂山系の中間部分、富士川の支流芦川の上流にある山里旧芦川村（笛吹市芦川町）その最上流に上芦川集落がある。谷間を東から西に流れる芦川の北側の斜面に沿って約1キロに渡り形成される集落である。甲斐と駿河を結ぶ古道「若彦路」の要所として設けられた関所を中心に発展し、本道から分岐した急勾配の枝道に特徴的な建物が建ち並び印象的な集落である。

この地域では明治に入ると養蚕が盛んになり、一軒の民家の内で日常生活の営みと繭の生産が行われるようになった。それまでの寄棟造りや、入母屋造りの屋根の妻側（短いほうの壁）を切り上げ、屋根裏を改良し、風や光を取り入れ蚕の生産環境をより良く



④江戸中期に建てられたとみられる兜造りの民家が今も多く残る。⑤深い山々に囲まれ段々畑が広がる



## ～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第14回 山梨県笛吹市



一般財団法人 日本不動産研究所

### 進む過疎化、失われゆく原風景

# 山村集落を守る地方創生を

の形に似ていることから「兜造り民家」と呼ばれている。古いものでは江戸中期に建てられたと推定される兜造りの民家が多く残されている。もともとは茅葺き屋根であったが、現在では殆どが茅葺きの上にトタン等を被せ、窓もアルミサッシに替えて生活が営まれている。また、斜面地を利用するため先人達が石垣を積み上げ開墾した努力のたまものである段々畑がいたるところで見られる。養蚕が盛んになる前はアワ、ヒエ、ムギ、サツマイモなどを作り自給自足生活を送っていたようである。今から300年以上前に上芦川集落の人々は生活や農業に水を利用するため、上流の芦川から2キロに渡り水路を引き、自然の沢も利用して集落内に水路を巡らせる大仕事を成し遂げた。「溜桶」と呼ばれる水汲み場を設け、昭和30年代までは飲料水としても利用されていた。今でも「溜桶」は残っており、野菜を洗うのに利用するなど生活に密着している。



集落内に引かれた水路の水汲み場となる溜桶

育てる作物は変わっているのだが今も段々畑で農作業をする人々の姿が多く見られた。深い山の緑に囲まれ、ひな段に積まれた石垣の上に畑と民家が折り重なるように連なる風景にどこか懐かしい思いを感じる。

#### 張り巡らされた水路

上芦川集落のもう一つの大きな特徴が水路である。芦川から30メートル高い場所に立地しており、川の水を使うには不便な場所であった。そこで、

年一回集落の人々が協力し、水路の補修や生い茂った草の除草などの清掃を行い、先人の偉業を大切に守っている。集落内を散策していると水路から流れる水の音が心地よく響きリラックスできる。

茅葺き屋根を修復した民家を体験施設、宿泊施設、カフェとして活用したり、笛吹市主催の上芦川現地散策会や「兜造りの家並みと石垣の里をぶらぶら散歩」と題した地元ガイドによるツアーもある。しかし、ここの人々にとって

先人達から代々受け継いだ家や畑、水、習慣などは特別なものではなく、当たり前の日常なのである。だからこそ現在の姿を残しているのだろう。甲府から車で40分ほどの場所なのだが、今なお生きていく日本の原風景と言えるのではないだろうか。

上芦川集落は令和元年5月31日時点で人口1222人のうち65歳以上の老年人口の割合は43%、75歳以上の後期老年人口の割合が31%を占めており限界集落に近い。そこで暮らす人々がいなければ家も畑も荒れていき、何百年の歴史で培ってきた情景も失われるだろう。過疎化が進む山村集落の生活を守る地方創生政策に力を入れてもらいたい。

（甲府支所／不動産鑑定士・杉本裕昭）